

に、フランス語を選択したからだつたそだ。

そんな高橋さんはフランス語を日本語に翻訳する上で、「文法構造の違いやフランス語独特的表現方法に苦労する」と話す。しかしその反面、辞書には載っていない概念を日本語で正確に合わせることができた時は、やりがいを感じるそうだ。高橋さんは文章に書いていない概念を読み取ることの作業を「行間を読む」と表現した。「1行1行の間の深みをどこまで読み取れるか」が翻訳での大切な作業だと言う。それが好きで30年間この仕事をやってこれたそうだ。「もちろん読者にいいと言われたときもやりがいを感じるが、本は売れる売れないではない」とも話した。

高橋さんが翻訳する本の中で1番多く目立つのが、「パスカル・キニヤール」というフランスの作家の作品だ。彼の本に惚れ込んで、フランスに行く度に彼に会い、話をしているそうだ。キニヤール氏に惹かれた理由を「思いがけない巡り合われがあつて」と高橋さんは語つてくれた。高橋さんは昔からある詩人が

好きだった。そして実はキニヤール氏の父親が、その詩人の研究家だつたことが、彼との会話でわかつたそだ。キニヤール氏の家の壁にはその詩人の多くの作品が飾られており、彼は幼い頃からその作品に触れていたのだ。それがキニヤール氏の作家活動にも少なからず影響を与えていたはずだ。それ故、高橋さんは自然と彼の作品にも引き込まれたのではないか、とのことだ。

翻訳にかかる時間は、若い頃と今とではピッタリは大分ゆっくりになつたという。翻訳は1日8時間もやるとおかしくなるというほどハードな作業だそうで、「今はそんな体力はきもやりがいを感じるが、本は売れない」と笑つて話した。

人生は決められない

高橋さんは彼自身の人生経験から、高校生の内に大学や就職のことなど、自分の人生がわからなくて決められないのは当たり前だという。会社勤めを辞め、安定した生活を自ら手放し、後悔したことは何度あつたが、今思うとその選択は間違つていなかつたと高橋さんは話



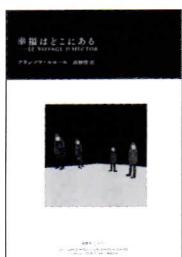
高橋さんを囲んで

取材を終えて

取材の後、高橋さんの好きなフランス語を伺い、二つ教えてくれた内の一つが「Bon Vivant」である。「ボンヴィヴァン」と読むこの言葉は辞書には「樂天家・美食家」と載っている。しかし高橋さんは「人

いるだろうか。裕福な人が必ずしも幸せだと感じているわけではない現代で、どうしたら幸せだと思えるのか。この本には皆さんを助けるヒントが散りばめられている。

生を楽しむ、あるいは愛する人といふニュアンスがある」と話す。人生は辛いことや苦しいことも一杯あるが、「自分の持つ手や知恵を使い、自分が納得する生活をすることが出来る人」を指す言葉だと教えてくれた。今回の取材は、時間を忘れるほど充実したものであった。今回、偉大な先輩と話す時間を持てたことに感謝したい。



に
は
ど
ん
ソ
ワ
・
フ
ー
ル
幸
福
の
『
る
ル
鹿
舎
』

す。「自分自身のことは自分が一番理解しているというのは一番の嘘

で、人生は長い時間かけて試行錯誤しなければならない」と熱く語つてくれた。そして、「最初はつまらなくとも、長く続けていれば楽しくなることもある」「何か一つのこと

をやり続けなさい」と私たちにメッセージを送つてくれた。

皆さんには今自分は幸福だと感じ

いるだろうか。裕福な人が必ずしも

幸せだと感じているわけではない現代で、どうしたら幸せだと思えるのか。この本には皆さんを助けるヒントが散りばめられている。